



金谷レース工業株式会社

所在地 桐生市東久方町 1-1-5

所有者 金谷 榮夫氏

国登録有形文化財

吾妻山を間近に望み青空に映える金谷レース工業は、桐生を代表するノコギリ屋根の風景を生み出している。

大正8年（1919）、当初は8連のノコギリ屋根工場として建てられた。煉瓦造りのノコギリ屋根は市内で唯一。煉瓦の壁はイギリス積みと呼ばれる工法、使われている煉瓦は渋沢栄一ゆかりの深谷市・日本煉瓦製という。

隣接する事務所棟も国登録有形文化財に指定されており、スクラッチタイルを貼った外観とお洒落な意匠を施したドアや窓などには、時代を先駆けたデザイン性を感じられる。90年近い風雪に耐え、重厚な風格を漂わす建物はレース製造を行う現役の生産の場でもある。





南川潤住宅

所在地 桐生市菱町3丁目

所有者 秋山 克也氏

三田文学賞を二回にわたり受賞し、新進作家として大きな注目を浴びながら、折からの戦時体制下に夫人の郷里である桐生に疎開してきた南川潤。彼が終の棲家としたのが菱町3丁目、桐生川を見下ろす高台に佇む住宅である。

戦後、南川潤は旺盛な創作活動を桐生の地で続ける一方、上毛文芸会や緑地帯文芸会など地方の文芸活動を指導、桐生倶楽部の活動にも参画し、戦後の桐生文化の向上に貢献した。坂口安吾が桐生に来たのも、南川を頼ったことだった。

「何かしら故郷のようにこの街を愛する心になっている」吾妻公園に建てられている文学碑には、「窓ひろく季節」の一節が刻まれている。丘陵を背にした住宅の前には桐生川が流れ、その先には桐生の街が広がる。見事な風景を望む庭で南川が倒れたのは昭和30年9月、安吾逝去のわずか7ヵ月後だった。

作家の面影を偲ばせる純和風の住宅は、長男の秋山克也氏が当時の姿そのままに守り続けている。





日本キリスト教団桐生教会

所在地 桐生市錦町 1 - 3 - 5 2

電話番号 0 2 7 7 - 4 4 - 3 7 0 3

日本キリスト教団桐生教会の最初の建物は、明治 1 1 年（ 1 8 7 8 ）に本町 6 丁目に建設された。教会設立 5 0 周年にあたる昭和 3 年（ 1 9 2 8 ）に会堂の改修が決定されたが、昭和恐慌とも言われる大不況の中で献金が集まらず、献金運動に二年が費やされ、錦町 1 丁目のこの地に移転建設したのが、現在の桐生教会の建物である。昭和 5 年 1 月に着工、7 月に完成し、総工費は 1 万円だった。

近世式ゴシック様式、木造モルタル造り、間口 6 間、奥行き 1 0 間半、天井は三階分に匹敵する高さがある。設計施工は小川組（現小川建設）が行ったという記録があり、明治学院大学のチャペルを工事関係者が見学し、これを模して作ったという逸話が残っている。

教会を囲むヒマラヤ杉の大木が美しい調和を創り出し、日曜日の朝には多くの人々が礼拝に訪れる。深い精神性に裏付けられた風景でもある。

最近はクラシックコンサートが定期的に行われるようになり、地域への開放が図られている。





樹徳高等学校木造校舎（第二校舎）

所在地 桐生市錦町 1 - 1 - 20

電話番号 0277 - 45 - 2258

理事長 野口 秀樹氏

学校法人明照学園樹徳高等学校は、大正3年（1914）桐生市本町六丁目田中山浄運寺住職野口周善氏により創立された裁縫伝習所を母体として、同年10月樹徳裁縫女学校として正式に認可を得、以来90年以上にわたり隆盛と充実の歴史を培ってきた。

現在、同学園に学ぶものは1530名あまり、ここを巣立った卒業生は2万6千名あまりを数え、地域社会への貢献度は大きい。

端正な姿を見せる木造校舎は、第二校舎と呼ばれ、昭和7年（1932）に建設された。当時、本館として使われた。

現在でも現役で使われ、木の床やガラス窓は丁寧に磨き上げられている。木造校舎に足を踏み入ると懐かしさとともに、学びの空間の歴史と高い精神性が感じられる。校舎の周りには、学園の発展に伴い建てられた鉄筋コンクリートの校舎が囲むが、それだけに木造校舎の存在感が際立っている。





桐生新町西裏路地

所在地 桐生市本町2丁目周辺

桐生新町は、慶長年間（1596～1615）直轄領代官大久保長安の手代大野尊吉が桐生川扇状地上の荒戸原と呼ばれた下久方村・荒戸村の一部を割いて町立てした在郷町である。

下久方村の宮内天神を宮原へ遷し、ここを宿頭に南北9町を町人街に充て、下久方村の丘陵を削平して陣屋を構え、町人街との間に1町32間の横町を作って通路とした。周囲の町境に高さ5尺の土居を築いて郭とし、囲郭内の中央に幅5間の道路を開き、その両側を間口7間、奥行き40間前後の短冊状に地割りして屋敷とした。町人街には、支配下の各村から子供2人以上の世帯では1人を移住させ、ほかに近郷からの入植者を募って戸口の増加を計画した。（桐生商工会議所五十年誌より）

当時としては画期的な都市計画により作られた桐生新町は、本町1、2丁目にその名残が見られるが、裏道に入るとかつての面影がより色濃く残る風景が展開する。

全国の路地のある街がいま見直されつつあるという。この界限は、街の記憶を伝え、住んでいる人たちの生業や生活を偲ばせる奥行きの深さを感じさせる。まさに桐生らしい風景である。

